
とある茨の禁書目録

darkrad26

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある茨の禁書目録

【Nコード】

N9256Z

【作者名】

darkrad26

【あらすじ】

とある魔術の禁書目録の世界に紛れ込んだ一人の異物。彼はどのような影響を物語に与えるのだろうか。とある茨の禁書目録はじまります。

プロローグ

『学園都市』

東京西部を一気に開発して作り出され、一部を神奈川や埼玉に及ばせながら

東京都の中央三分の一を円形に占めている。

「記憶術」だの「暗記術」という名目で超能力研究、即ち「脳の開発」を行っている学生の街である。

その学園都市のある研究所。

チャイルドエリア

普段なら置き去りなどを使って非人道的な研究を行っているが、今は半壊しており、銃声や悲鳴が響き渡っている。

「まったく、この程度の研究所潰すのになんで俺が出てこなきゃならないんだよ」

そう悪態をつきながら銃弾飛び交う研究所内を歩いているのはホストのような格好をした少年。

何よりも目をひくのは背中に生えている純白の羽根だろう。

時折思い出したようにその羽根を振るい、あたりを破壊している。

学園都市に8人しかいないレベル5の第二位『ダークマター未元物質』垣根帝督である。

「しょうがないじゃない。どんなにつまらない依頼でもウチに來た以上断れないんだから」

そう答えたのは14歳ほどで、小柄で華奢な体つきにも拘らず、まるでホステスのような背中の開いた丈の短いドレスを着込んでいる少女。

垣根帝督とは違い、特に何もせず一步後ろを歩いている。

「ってかお前も仕事しろよ。さっきからついてきてるだけじゃねえか」

「私の能力は『心理定規』^{メジャーハート}、戦闘向きじゃないんだしいいじゃない。邪魔はしてないでしょ？」

「確かに邪魔はしてないけどよ。さっさと終わらせて帰りたいんだよ」

垣根はため息をつきながらそうばやくと前方にある嚴重に封鎖された扉を一瞥すると
羽根の一撃でもって跡形もなく吹き飛ばした。

「……………」

「…なによこれ!？」

部屋に入った二人の眼に飛び込んできたのは殺氣立った研究員達…

ではなく、おびただしい数のおそらく
研究員であろう死体。

ここで迎え撃つつもりだったのだろう。銃やら駆動鎧、その他にも
用途のわからない機械がそこら中に
散らばっている。

それだけなら驚くことなはない。他の構成員が始末した後に自分た
ちが来たのかもしれないからだ。

だがそれは撃たれたりなんなりしてただ死んでた場合のことだ。
だがこの死体たちは例外なく全て干からびている。

中にはまるで数千年も放置され風化したように崩れているものもある。

「これってミイラ？ここはエジプトじゃなくて日本よ？」

「体中の血液が抜かれてやがる。こんなことができるのは…」

「オレだよ」

生きてる人間は誰もいないはずの部屋に声が響く。

その瞬間垣根はさらに羽根を生やし、三対の翼でもって臨戦態勢を
取り、

『心理定規』はその後ろに避難し拳銃を構える。

「警告だ、第二位。最近の行動は目に余ると統括理事会からのお達
しでな。そのせいで

このオレが派遣されたわけだ。心当たりはあるか？」

その声が聞こえてきたのは二人の頭上。なぜ気付かなかったのだろうか。

そこにいたのは魂まで奪われそうな雰囲気を持ち、天井に直立する漆黒の青年。

片目を覆う黒い長髪を無造作に括り、オーダーメイドであろうダークスーツを着こんでいる。

重力に囚われていないのかまるで天井が地面だというように佇んでいる。

何よりも特徴的なのはその眼、すべてを俯瞰するような無機質な瞳だった。

「てめえ第六位か！警告なんざされる謂れはないぞ！」

そう叫びながらも内心では学園都市への反逆計画がばれたのかと焦りまくっている垣根帝督。

普段ではありえないことだが焦りや相手が第六位ということもあって思わず考え込んでしまい目を離してしまった。

気付いた時にはもう遅い。能力の相性がいいとはいえ、自分では第六位には勝てないのだ。

致命的な隙を晒したかと齒噛みしながらも一撃入れようと天井に視線をやる。

が、最早そこには誰もいない。

「ちっ！（くそっどこに行きやがった）」

思わず舌打ちをしながらいつでも離脱できるように周りに気を配る。奇襲されたらその一撃を防ぐ自身は垣根にはなかった。

「やあ久し振りだね心理定規。よかつたらこれからディナーでもどうかな？」

「お久しぶりです北斗さん。私でよかつたらぜひお願いします」

「やはり君は笑っている方が可愛いね」

「そんな可愛いだなんて…」

悲壮な垣根とは違い第六位と心理定規は楽しそうに会話していた。しかもさっきの雰囲気はなんだったのかというほどの爽やかさである。

「北斗オオツ！！てめえ今めっちゃシリアスだったじゃねえかよ」
「！」

「うるさいぞ垣根。今いいところだろうが」

「うるさいわよ。今北斗さんと話してるんだから」

「えっ？俺がおかしいのか？つか息ぴったりだなおい」

一蹴である。最早その姿は可哀そつを通り越して哀れですらあった。

そして二人は垣根を無視してまだ楽しそつに会話している。

「そういえばまだおじさん達の相手をしているのかい？
気晴らしならオレがいつでも付き合ってあげるよ」

「本当ですか！？じゃあ部屋をとってあるのでディナーの後にも
そこで／＼」

「相変わらず積極的だね。喜んで付き合わせてもらっつよ」

「いちゃいちゃしている。

だが忘れているかもしれないがここはミイラが転がっている部屋の中である。

台なしだった。

「おい北斗。やっぱりこのミイラ共はお前がやったのかよ？」

復活した垣根である。

実に空気の読めない男である。

「…冷蔵庫が。……当たり前だろ？他にこんなことができる奴がいるんなら教えてほしいものだね」

「今なんつった？なあ？なあ？」

「それで警告についてだが…」

「無視かよっ！」

「黙れ冷蔵庫。そんなだからチンピラホストって言われるんだよ」

「てめえぶっ殺してやらあああっ！」

「黙りなさい冷蔵庫。北斗さんが話してるでしょ」

「なんなんだよもう…」

またもや一蹴。懲りない冷蔵庫である。
そんな垣根は無視して北斗は話を続ける。

「お前最近仕事の度に物を壊しすぎなんだよ。修繕費も馬鹿にならないらしくてな。」

借金になるらしいから…まあ頑張れ」

「…そんなことで来たのか？」

「暇だったからな。アレイスターの頼みを断るのもあれだし」

「ご苦労さまだな。…ちょうどいいから仕事手伝ってくれねえか？
お前の『茨棘之冠』クラウンソーンならすぐ終わるだろ？」

「さっきの会話を聞いてなかったのか？オレはこれからデートなんだから無理だ。

じゃあ行こうか？」

「はい北斗さん」

そう言うのと北斗は心理定規を抱きかかえる。いわゆるお姫様抱っこだ。

何度でも言おう、ここはミイラだらけの部屋である。

「まだ仕事が終わってねえぞ！？」

「そんなもんお前がやれよ。何のためのレベル5だ」

「男女差別反対！」

「女の子には優しくするもんだよ。

…っと、言い忘れてたが借金は12億2800万だそうだ。それじゃ」

「…は？ちよつ待つっ…」

垣根が詰め寄ろうとするがすでにそこには二人の姿はなくなただ空しく声が響くだけである。

どれほど時間がたっただろうか？呆然とする垣根の前に頭部に環状の金属製ゴーグルをつけた少年が歩み寄る。

「リーダー終わりましたよ。……どうかしましたか？」

「…１２億…ふっふふふふふふふふふ」

「リーダー！？」

しばらく研究所に不気味な笑い声が響き渡った。

プロローグ（後書き）

はじめましてdarkrad26です。

この小説は妄想があふれ出た結果によるものなので見苦しいと思いますが、

感想もらえたりすると励みになります。

ちなみにこの小説の主人公は黙っていればインテリヤクザにしか見えないと言われた作者をモデルにしています（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9256z/>

とある茨の禁書目録

2011年12月28日23時46分発行